

紀行と史実・史料に拠る

新訳南総里見八犬伝

平島 進 訳著

平島 進<ひらしま・すすむ>

大正6年生まれ。幼少年期を里見八犬伝ゆかりの千葉県安房郡に過す。
神奈川師範(現横浜国立大学)卒業。
横浜市保土ケ谷区長、同市教育長などを経て、現在、横浜市教育委員会委員長。

新訳南総里見八犬伝

1981年9月20日 第1刷発行

著 者 — 平島 進

定 価 — 4,800円

©Susumu Hirashima 1981 Printed in Japan

発行者 — 館岡夏緒

発行所 — 昭和図書出版

東京都文京区白山3—2—15 〒112

電話 03—816—5291(代) 振替東京7—69532

印刷所 — 西方美術印刷

製本所 — 広栄社

装 幀 — 睦工房
製 作

●落丁本乱丁本はおとりかえします

I S B N 4—87986—023—9

発刊に寄せて

貫 達人

一昨年NHKテレビで放映された大河ドラマ「草燃える」は、伊豆山、鎌倉の観光客をふやしたといわれている。「草燃える」は永井路子さんの歴史小説を台に脚色された。永井さんは歴史をよく調べておられるとはいえ、中には作家としての推測、解釈が多く含まれており、そこに観る者の興味をひく部分があったといえよう。そして、それが観光のきっかけをつくったのである。

周知の如く、馬琴の「南総里見八犬伝」は国文学史上にいう読本の代表作であり、時代を十五世紀後半に、舞台を関東甲信越に設定して多数の人間を登場させた読みものである。主要人物は八犬士であり、勧善懲悪、因果応報の理で話を收拾、統合しているほか、いわゆる化政文化の影響もあって、多くの怪異譚をちりばめ、読者を飽かしめない工夫をこらしている傑作である。

八犬伝は多くの読者を得た。従って読者は八犬士が活躍した場所に興味をもつのは人情の自然である。その土地の人にしてみれば、ここがその場所であったと説明することが、サービスになるわけである。鎌倉でいえば、大塔宮の土牢などがそれで、観光客は満足する。このような事は歴史学の次元の問題でなく、もっと人間的なものである。

著者平島先生は、安房に生まれた因縁もあり、八犬伝にあらわれる土地をくまなく精査されたという。そして、いまは横浜市の教育長を経て教育委員長長の要職にある方である。現代の教育界の長所、短所を身を以って感得された結果、考えるところがあって、この著作を成就されたと承っている。全編を通読するに、大変よみやすく、その意図は十分成功していると思われる。

過日、吉田太郎先生と同道、序文を求められた。固辞するも叶わず、よって蕪辞を連ねて序とする次第である。

昭和五十六年八月

序に代えて

吉田太郎

本書の真価は、史学の權威であられる貫達人先生の序文につきているので、私は著者の人柄の片鱗を書かせて頂いてその責を免れたいと思う。

人の一生は、人と人との出会いから始まるという。私と平島さんとの出会いは、もう四十五年も前の昭和十一年四月始めに遡る。平島さんが名門の安房中学から神奈川師範に入学されたとき、私が学級担任であり、歴史を教えたのである。

入学式後父君が拙宅に来訪されて、「進は文学志望であるが、私の後継者として小学校教師になることを無理矢理勧めたので、卒業するまで見守って欲しい」といわれた。

父上は名家の出身で青山師範を卒業されて長年小学校教師を勤められ、こよなく小学校教育に愛着をもたれての念願であった。

私は父君の自託を胸に秘めて本人にも話したことはなく、本科二年と専攻科一年の三年間を見守った。専攻科では歴史の選択必修で私がお相手をした。研究レポートは、広く史料を集め、丹念に読破し、理路整然と組み立て、流麗な筆致の名文であったことは今でも鮮烈に記憶している。

このころの師範生は、俊才揃いで何一つ注意したことはなかった。平島さんは目立つ存在でなく寡黙、誠実、謙虚な人柄であった。

卒業後早くから横浜市の教育行政畑に入り、栄進して遂に教育長になられた。

横浜市は米軍の空襲で焦土と化し、おまけに米軍が長く駐留し、最悪の状況の中での教育復興は、ないもの尽しで難問山積であり、教育長としては難職であり、身心とも使い果たされた。

その教育業績は、横浜市教育史下巻に書かれている。平島教育長の後世に残る金字塔は、小・中学校の新増築には、政府と国会に運動を仕掛けた張本人となって、遂に国庫補助額を大幅に増額させた

ことである。

平島さんから教育長の業績を私は一度も聞いたことはなかったが、横浜市教育史編修のお手伝いをしてみ始めて知ったのである。これが平島さんの人柄であると思っている。

長年の教育長の激務を去って、第三の余生は悠々自適の生活と思っていたのに、昨年の春先突然と快著の膨大な原稿を見せられて、私は驚嘆した。これが青春の文学への情念の爆発の著述となった。私の手に負えないので貫先生にご紹介をしたら、ご多用中にも抱らず原稿を精読され、史書として添削を賜わった上に、巻頭に序文まで頂いたことは、著者にとっても私にとっても無上の光栄であり、貫先生の奥床しいお人柄をしみじみとお慕い申上げている。

故里の文芸作品中の最長篇、滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」を読破して消化し、忠実に史跡を踏査し、史話を探訪し、写真を要所要所に挿入し、歴史地図と里見氏をはじめ関係諸氏の家系図まで組み入れての完璧の著作となった。私は校正のお手伝いを申出で、作品を読む中にどこまでが馬琴か、どこからが平島さんかの見境いがつかない名文に読み惚れている。これをきっかけにして、これからは歴史のロマンを物されての著述の統刊を願って止まないものである。

父君のご霊前には、父上の宿願達成の証明書として、横浜市教育史上下二冊と、自分の素志成就の第一作としてこの快著を捧げられることを望んで筆を擱くことにする。

昭和五十六年八月

(京浜女子大学教授)

まえがき

芥川龍之介氏の名作「戯作三昧」に、次のような文章がある。

『馬琴は薄暗い円行燈の光の下で、八犬伝の稿をつぎ始めた。……………（中略）……………』

「根かぎり書きつつける。今己が書いてゐる事は、今でなければ書けない事かも知れないぞ」

しかし光の霧に似た流は、少くもその速力を緩めない。反って目まぐるしい飛躍の中に、あらゆるものを溺らせながら、澎湃として彼を襲って来る。彼は遂に全くその虜になった。さうして一切を忘れながら、その流の方向に、嵐のやうな勢で筆を駆った。

この時、彼の王者のやうな眼に映ってゐたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀譽に煩はされる心などは、とうに眼底を払って消えてしまった。あるのは、唯不思議な悦びである。或は恍惚たる悲壮の感激である。この感激を知らないものに、どうして戯作三昧の心境が味到されよう。どうして戯作者の厳かな魂が理解されよう。ここにこそ「人生」は、あらゆるその残滓を洗って、まるで新しい鉾石のやうに、美しく作者の前に輝いてゐるではないか。……………」と。

こうした真摯な創作態度をもって、文化十一年（一八一四年）から前後二十八年もの歳月をかけ、天保十二年（一八四一年）に完結された全九集、九十八巻、百六冊に及ぶ大著が、曲亭滝沢馬琴によって書き上げられた大長

篇小説「南総里見八犬伝」である。

殊に天保四年の秋頃から右眼が見えなくなり、天保十一年の十一月からは全く失明してしまい、息子の嫁のおみちの手を借りて、一字ごとに字を教え、一句ごとになづかいを教えて代筆させたという。

馬琴をして、「我を知る者はそれ唯八犬伝か」といわしめた如くに、作者がその精魂を傾けつくした大作であり、我が国の長篇小説中の最高水準を示すものと申しても過言ではあるまい。

殊に、「水滸伝」や「三国志」によって構想されたといわれる如くに、登場人物は実に四百余名に及び、大河のような迫力と、重量感に満ち、而も儒教的な勸善懲惡思想と、法華經を主軸とする因果応報の仏法理によって統一された価値観こそは、道義思想にくらく、ともすれば名利を追って個我に生き、権謀術策をもてあそぶ昨今の世情を想うにつけて、是非、再思再読さるべき名著であると思う。

ただ、馬琴も八犬伝の巻末「回外剩筆」に述べている如く、その史料は、「房総史料」等、当時の史書、地誌書等を抄録しているものの、交通事情等もあって、房総の地はもとより、物語の舞台に登場する地は、文献にたよって殆ど自身踏査していない。

且つまた、里見義実が鎌倉から安房へ渡ってより、同国内を統一するまでの物語は、全く通説にもとり、史実を没却している。

その為、このような名著であるにもかかわらず、歴史家からは嫌焉され、安房の国の人々すら、架空迂遠の物語として、その価値を認識し得なくなっている。

この点、岩波文庫版「南総里見八犬伝」の校訂、解説をされた小池藤五郎氏も、同書の巻頭に、「正月頃から野に水仙の薫っている安房国は、南総里見八犬伝によって一人のゆかしさを増している。私は嘗て

この地にとどまり、小湊、東条、滝田、富山などを歴遊したが、其処に住む人々の多くは、里見八犬伝の名をも、亦、その土地が八犬伝中に現れている事をも知らない。

誠に日本文学中の屈指の名作が、余りにも現代人とは没交渉である点を悲しまれてならなかった」と、述懐されている。

筆者は誠に浅学ながら、大方の識者、知縁の方の助力を得て、及ぶ限り自身で物語にゆかりの土地を踏査し、また文献を渉獵して、馬琴の「南総里見八犬伝」の精髓をば、世に紹介したいものと志した。

今、この物語に現れるゆかりの土地を歩いてみれば、その殆どが現地で照応され、筆者もいたく感動したものである。

それらは、つとめて訳述の中で煩瑣をかえりみずに記述した。それを物語の訳述と共に読んでいただければ、読者も新たな感懐を得られることであろう。

また、史実との関連については、「里見氏と八犬伝」で能う限り記述した。物語と照応して、共に御一読を乞う次第である。

またその故に本書においては、地名は、現地の名称を用い、人名もつとめて史実、史料に照応して、正しい姓名を用いることとした。物語の地名、人名と異同あるも、筆者の意のあるところを御賢察願いたい。

なお、原文は岩波文庫本を以てしても十冊に及ぶ大著で、且つ江戸末期の漢文調で書かれ、香気に溢れる名文ながら、極めて難解であり、現代人がその原文全篇を読みこなすことは至難であろう。その為に全篇の口語訳を一応考えたが、それはかえっていたずらに紙数を増幅し、且つ煩瑣を厭う現代人の読書にそぐわないと思料した。且つ、古来、内田魯庵氏の評言によっても、物語は結城合戦に始まり、八犬士会同をもって一応完結させるこ

とが至当と考え、その後の物語は、「追記」としてその梗概を記述するにとどめた。

また円地文子氏も申されるように、「南総里見八犬伝」をして、「八犬伝動物園」と称される如く、竜、犬、狸、猫、狐、虎等の動物が擬人化され、凝画化されて多数登場する。

しかし、こうした動物の妖怪趣味は、少なくとも余りに現代的でないと考え、極力必要最小限に割愛した。

再び繰り返すが、この物語の標榜するところは、あくまで仁義八行の精神であり、それらを貫いて厳然たる因果の理法が存するのであって、そこに作者が深く思いをひそめていることを特筆したい。ただ、多年にわたって、公僕生活を送ってきた筆者にとって、本書は初刊であり、且つ浅学非才の余りに、原作の香気を奪い、その筆勢・迫力をそこねたことは否めない。又、掲出した史実・史料も尚、裏づけに乏しいものもあり、多少の誤りがあることを恐れる。今後、多くの方の御示唆を得て、叶う限り補正につとめたいと念願している。

本書を公刊するに当って、鎌倉国宝館長、貫達人先生懇切な御指導と、作家、府馬清氏の、温かい御示唆を得た。

また昭和図書出版館岡夏緒氏を初め、会社の各位並に横浜市図書館の半沢正時氏や多くの先輩、友人に、限らない御援助を得た。ここに紙上、厚く御礼を申し上げます。

また恩師であり、元横浜国大教授であり、現に京浜女子大学教授をされている吉田太郎先生には、終始、激励と御援助を賜わり、本書の公刊も、先生の御力なくしては実現出来得なかったと思う。いつ如何なる世とて、恩師は有難いものである。謹んで本書を吉田先生に捧げたい。

昭和五十六年初夏

平島 進

目次

発刊に寄せて 貫 達人

序にかえて 吉田 太郎

新訳南総里見八犬伝

第一章 伏姫ふせひめと八房やつぶさ

第一節 結城合戦……………13

里見季基、義実父子の別れ

第二節 神余城かなまるの変……………23

山下定包、主君を弑す

第三節 勝山城内の謁見……………27

義実主従、安西に闘す

第四節 小湊蜂起……………30

義実、孝吉の援を得て金山城を制す

第五節 山下城急襲……………36

義実定包を討ち妖婦玉梓を斬る

第六節

安房館山千田城

金碗孝吉の死と大輔孝徳

義実安房平定、伏姫、八房と富山へ籠る

45

第七節

霊峰富山

伏姫自刃と大法師

58

第二章 八霊玉と八犬士

第一節

大塚の里

番作金蓮寺に公達の首を奪う 番作信乃の母手束と結ばる 大塚信乃生まれる

信乃、霊玉と村雨丸を授かる 信乃、犬川額蔵を知る 浜路と糠助の死 信乃、

村雨丸を失う 信乃、古河へ出立 浜路誘拐さる 浜路の最期と犬山道節 額

蔵、主家の仇を報ず

69

第二節

古河城の血斗

信乃、古河城の厄 芳流閣の激斗と犬飼見八

115

第三節

行徳古那屋の邂逅

行徳河畔の語らい 病友を助けて犬田親子の懊惱 小文吾、房八の血斗 身を

120

第四節

巢鴨の庚申塚

姥雪与四郎と音音 額蔵救出 戸田川、姥雪父子の奮戦

161

第五節	雷電山と妙義山……………	174
	雷電山の憩い 妙義山遊覧	
第六節	白井城下の戦……………	180
	犬山道節、定正を狙う	
第七節	荒船山合戦……………	185
	碓平のおとずれ 道節、莊助の邂逅 魂魄幽魂のいざない 五犬士会同す 荒船山会戦	
第八節	阿佐谷の野猪……………	208
	小文吾、船虫の出会い	
第九節	武州石浜城……………	213
	名笛あらし山と小篠、落葉 馬加大記の奸計 女田楽「旦開野」 犬阪毛野の 仇討 小文吾故郷行徳へ帰る	
第十節	足尾庚申山の妖怪……………	237
	犬飼現八 赤岩一角の亡魂 犬村角太郎と雛衣 船虫の奸言 籠山逸東太縁連 雛衣の赤心、妖怪を倒す 逸東太、船虫逃亡	
第十一節	甲州穴山と石和……………	274
	信乃と浜路 石和指月院の会同 里見公第五息女浜路姫 武田家と大法師 奸賊温内と奈四郎の最後	
第十二節	越後小千谷、片貝の受難……………	296

山古志村、牛の角突き 船虫、小文吾を狙う 賊徒を討ち莊介小文吾と会う
二犬士受難と稲戸由充

第十三節 諏訪湖畔と青柳宿の出合い…………… 315

諏訪湖畔の出合い 青柳宿の邂逅

第十四節 千住河畔の会同…………… 322

伏姫尊靈の加護 千住氷垣家に四犬士会同
△大法師、結城法要に出立

第十五節 湯島天神にて…………… 334

居合師物四郎の義俠 犬坂毛野と河鯉守如

第十六節 武州芝浜の報復…………… 346

船虫芝浜に淫を売る 奸賊船虫と温内を誅戮

第十七節 鈴ガ森、高輪の仇討…………… 353

犬坂毛野の復讐 忠臣河鯉守如の諫 孝子河鯉孝嗣、定正を走らす

七犬士結城法要に出立

第十八節 鴻巣の野づら…………… 371

里見家と浜路姫 奸賊暮山素藤

第十九節 上総布施館山城…………… 378

素藤奇計をもって城を乗取る 八百比丘尼の仙術、素藤を迷わす 素藤謀反、
御曹子捕わる 成義公出陣 親兵衛出現す 姥雪与四郎、音首の出現と、伏姫
神靈 里見老公、伏姫、籠穴に廻向 親兵衛主従三騎館山城へ乗込む 親兵衛、

神靈の加護を得て、奸賊妖賊を倒す 成義公、逆賊を征して凱陣

第三章 結願成就

第一節 結城法要……………	420
---------------	-----

八犬士会同 結城法要

第二節 八犬士安房会同……………	426
------------------	-----

ゝ大法師、結願成就を奉答 八犬士安房参着、両館ふたでんに閱す
八犬士妙真、音音等に会う 八犬士伏姫の墳墓に詣ず

追 記 I

追 記 II

里見氏と八犬伝―その時代的背景―

一 里見氏と義実

I 里見氏について	
II 義実安房へ渡る	
III 義実安房を平定	
VI その後の里見義実	

第一章 伏姫と八房

第一節 結城合戦

里見季基、義実父子の別れ

国鉄線で結城の駅を降りると、もうそこからでも、つむぎを織る機はたの音が聞えて来るような、低い屋並がつづく。そして、どの街すじのつきあたりにも古い寺がある。だから、先へ進むには、その手前で折れて鉤かぎの手に歩かなければならない。典型的な城下町であった。

結城城趾は、そうした街はずれにある。

周囲に堀を掘り、土塁どるいを築きあげた平城で、一面の稲田からは、比高十メートル程の高台になって、鬱蒼うっそうと生い茂った木立の中の城址には、本丸とその西の二の丸跡がある外には、既にかんりの住家が建ち並んでいる。

だが往時のこの城は、東に更に七、八百メートル、北に更に四百メートル程大きく、東は鬼怒川おにががわ、西は田川たがわまで続いており、それらの河が自然の外堀を形成した、広

大な城であった。

形式的には群郭式城郭で、本丸を中心に、その両側に東館と西館があり、鶴が両翼を広げたような形をしている所から、鶴城とも称されたという。現在でも城址に、本丸、本町、東館、西館の名が残っている。

今は茨城県に属する結城も、もとは下総の国で、利根の長流がその頃は江戸湾にそそぎ、鬼怒川が常陸川ひたちがわとなつて霞ヶ浦、土浦に流れていたから、それが更に自然の要害を形づくっていた。

結城合戦物語にも「西は大河を構え、四方の総堀広く深ければ、大船の泛ぶが如きなり」と、表現された程の堅城であった。

この城で、永享十二年（西紀一四四〇年）の春四月、関東をゆるがす大動乱の口火となった結城合戦が、戦われたのである。

室町幕府は將軍義持よしもち（四代將軍で、花の御所、義満の子に当る）の代、鎌倉府の御所、足利持氏は、かねてから、この義持から將軍職を継嗣しようとの默契があったらしい。然し、その將軍義持に子の義量よしかづが生れてからは、そ

